

7 研究の成果と課題

(1) 本研究の成果

① 令和2年度提案授業実践校（香南中）における生徒の姿より

単元のはじめに行った試しのゲームでは、すべてのチームでパスがつながらず、得点を取ることができない状況だった。その原因として、“パスがつながらない原因”を理論的に分かっていないことだと判断した。そこで、なぜパスがつながらないのかを、映像資料を用いて考えることができるようにした（図1）。パスがつながったシーンと、パスカットされたシーンとを比較し、ディフェンスの位置や、攻撃する時に有効なスペースの有無、ボールを持たない選手がどのように動くのかを何度も話し合った（図2）。単元が進むにつれ、「スペース」や「〇〇に動こう」、「いつパスを出すか」等、本単元で身につけてほしい内容に関連するキーワードが、生徒の発言の中で何度も出るようになった。その結果、単元のはじめでは、あまり動くことができなかった生徒（特に運動の苦手な生徒）も、単元後半では、何度もパスをもらおうとスペースへ走り込んだり、得点をとって喜んだりする姿が多く見られた。

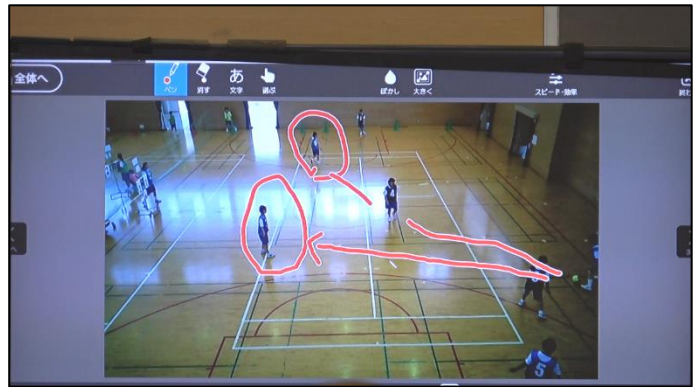


図1 映像資料を活用した指導



図2 話し合いの様子

また、本実践ではワークシートを工夫し、生徒と教師で目標や学習の見通しを単元前に共有したことから、知識の定着や知識を活用して表現することができた生徒が多く見られた（図3）。運動の苦手な生徒のまよめの記述からは、運動やスポーツの楽しさを味わったことやこれからの生活の中でも積極的にスポーツと関わろうとする等の記述も見られた（図4）。

単元開始前 (BEFORE)	単元終了後 (AFTER)
<p>★まっすぐ走るためのポイントを書き込んでみましょう。</p> <p>パスをつなぐために必要なことは何でしょうか？</p> <p>パスを出す人 パスを受ける人</p> <p>★下の場面で得点をとるためには、どのような攻撃が有効か？「パス」「シュート」の人の動きをそれぞれ矢印で示しましょう。また、そう考えた理由を書きましょう。</p> <p>理由 パスをつなぐために必要なことは、パスを受ける人がまっすぐ走ることです。パスを出す人は、パスを受ける人の後ろからパスを出すと、パスをつなぐことができます。</p>	<p>★まっすぐ走るためのポイントを書き込んでみましょう。</p> <p>★パスをつなぐために必要なことは何でしょうか？</p> <p>パスを出す人 パスを受ける人</p> <p>★下の場面で得点をとるためには、どのような攻撃が有効か？「パス」「シュート」の人の動きをそれぞれ矢印で示しましょう。また、そう考えた理由を書きましょう。</p> <p>理由 パスをつなぐために必要なことは、パスを受ける人がまっすぐ走ることです。パスを出す人は、パスを受ける人の後ろからパスを出すと、パスをつなぐことができます。</p>

図3 単元前後に記入するワークシート

<p>単元振り返って</p> <p>球技「ゴール型」の授業を通して、あなたが学んだこと、考えが変わったこと等を書いてください。</p> <p>ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。</p> <p>授業の感想・質問など</p> <p>自分の知らないゴールの知識を知ることができて良かったです。</p>
<p>単元振り返って</p> <p>球技「ゴール型」の授業を通して、あなたが学んだこと、考えが変わったこと等を書いてください。</p> <p>ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。</p> <p>授業の感想・質問など</p> <p>ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。ゴール型は、ゴールに向かって走り、ボールをゴールに入れることです。</p>

図4 運動の苦手な生徒のまよめの記述

② 保健体育学習に関するアンケート調査結果より

令和2年度提案授業を行った高松市立香南中学校生徒（第1学年：男子31名、女子29名、計60名）に対して、単元実践前（8月）と単元実践後（10月）にアンケート調査を行った。「運動やスポーツをすることは好きですか。」「あなたにとって運動やスポーツは大切なものですか。」「保健体育の授業は楽しいですか。」等の項目においては、いずれも肯定的回答率が高まった（図5）。詳細をみると、運動が苦手と感じていた生徒が、運動やスポーツ、体育授業に対して肯定的に捉えることができるようになったことが分かった。本単元では、サッカーという素材を、運動の苦手な生徒も夢中になれるように、ルールを簡単にしたり、ボールや資料を工夫したりし、すべての生徒が教材としっかりと向き合いながら学習を進めることができるようにした成果とも言える。

また、「友だちからのアドバイスや意見によって、うまくできるようになったり、分からなかったことが分かったりしたことがありますか。」という項目に対して、ほとんどの生徒が「はい」「どちらかといえばはい」と回答した。単元を通して、チームで話し合い、振り返る活動を繰り返して行ってきた成果と言える。

高松支部では、すべての生徒に「できた！」「わかった！」などの学びを実感することをねらいとしていた。「『できた！』『わかった！』などの達成感や充実感を得られることがありますか。」という質問項目に対して、令和2年度実践、令和元年度実践ともに「はい」と回答した生徒は増加した（表）。特に女子生徒の増加が大きい。また「中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか。」という項目に対しても同様の結果が得られた。

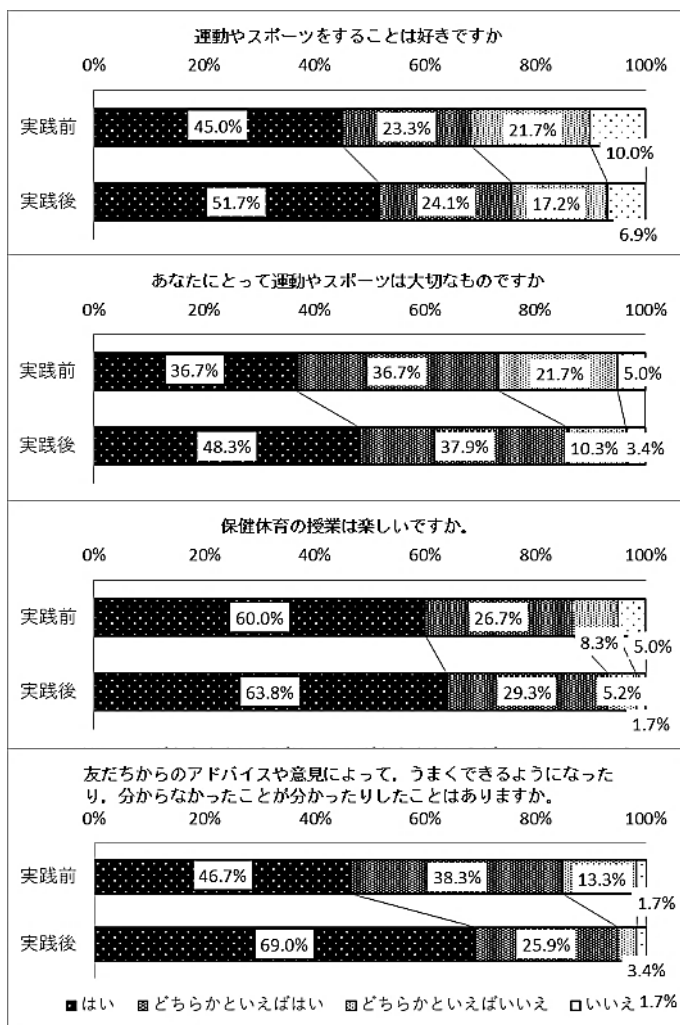


図5 単元前後のアンケート結果①

表 「はい」の回答が増加したアンケート項目と数値

学校	性	「できた！」「わかった！」などの達成感や充実感を得られることがありますか		中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか	
		実践前	実践後	実践前	実践後
香南中学校 (第1学年)	男子	41.9%	43.3%	32.3%	40.0%
	女子	41.4%	57.1%	35.7%	39.3%
一宮中学校 (第2学年)	男子	61.5%	100.0%	76.9%	84.6%
	女子	57.1%	92.9%	35.7%	42.9%
古高松中学校 (第3学年)	男子	50.0%	52.9%	43.8%	70.6%
	女子	57.1%	71.4%	42.9%	64.3%

③ 教師への効果

2年間の3つの実践は、『運動の苦手な生徒が夢中になって取り組むことができるようになるためにはどうすればよいか』という視点で、3つの“対話”を踏まえた授業づくりを行った。ベースボール型、ネット型、ゴール型の本質的な面白さとは何かをまず指導者自身が考え、その面白さを失わない教材を開発してきた。開発した教材を研究部員で何度も試行し、修正した。研究部員同士で、予想される生徒の姿やつまづきを意見し合い、発問や指導方法を考えた過程は、実践を行った授業者のみならず、それに関わった多くの研究部員の授業づくりの考え方にも影響を与えたと考える。本研究部会の教員（教員4年目）は研究授業参観後に「男子生徒と女子生徒がお互いに意見し合いながら一生懸命ゲームに取り組む姿が見られたことに感動した。研究部会に参加し、教材づくりの考え方、運動の苦手な生徒への関わり方、男女共習で授業を行う際の留意点など、自分の授業に生かせることをたくさん学んだ。」と述べた。

令和2年度の実践においては授業者自身、次のような考え方の変化が起こったという。

研究部会を行う前は、「あれもこれもたくさん教えたい。」「サッカーは、大きなゴールを使って11人で（既存のルールで）行うもの」という考えだった。しかし研究部会や指導案検討会を繰り返していくうちに、「既存のルールで行うと、運動の苦手な生徒は、サッカーの面白さを感じないまま授業を終えてしまうのでは…。自分のこれまでの授業でも運動の苦手な生徒が夢中になって取り組む姿は少なかったのでは…。」と考えるようになり、自分自身の授業づくりの在り方を見つめ直した。さらに、単元を通して何を教えるべきなのかを考えていくうちに、「サッカーの面白さとは何か？」という疑問を授業者自身もつようになった。これこそが教材研究の本質ではないだろうか。授業者自身がサッカーの面白さを深く考えなおすことで、教えるべき内容を精選することにもつながる。教えようとする内容が多すぎて、生徒自身が何を学んだのかが分からない授業を回避することができる。

授業実践後、授業者へのインタビュー調査を行った際、「研究部会を繰り返しながら、自分自身が考える“サッカーの面白さ”を生徒たちに味わわせるために、教えることを精選し、シンプルに授業をつくることのできるようになった。」と述べた。今回の単元は、球技「ゴール型（サッカー）」で実践を行ったが、その他の領域・単元においても同様の考え方で授業づくりを行うことができ、高松支部の提案内容のさらなる広がり期待したい。



(2) 今後の課題

① 運動の苦手な生徒への個別の支援の在り方について

これまでの実践より、教材を工夫することで多くの生徒が運動やスポーツ、体育授業に対して、肯定的に捉えることができるようになることが分かった。しかし、運動の苦手な生徒が「できた!」「わかった!」などの達成感や充実感を得られることができるようになるためには、授業内での様々な工夫、支援が必要であることが分かった。今年度の実践の中では、データや資料等を活用して、活発な話し合いを行うことができていたが、その中で「できた!」「わかった!」等を感じるためには、教師が個別に支援を行う必要がある。データや資料を提示して終わりではなく、どのように活用させるかの視点を欠いてはいけない。今後は、運動の苦手な生徒に対してどのように支援を行うかについて継続的に考え直していく必要がある。

② 球技領域以外での実践

令和元年度には、ネット型、ベースボール型、2年度はゴール型で実践を行い、“3つの対話”を踏まえた授業づくりはある程度効果があることが分かった。今後は、球技領域以外での実践を行い、本研究内容が県下保健体育科教員の授業づくりのよりどころとなるようにしたい。